

令和三年度 第一学年 期末テスト

第一学年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

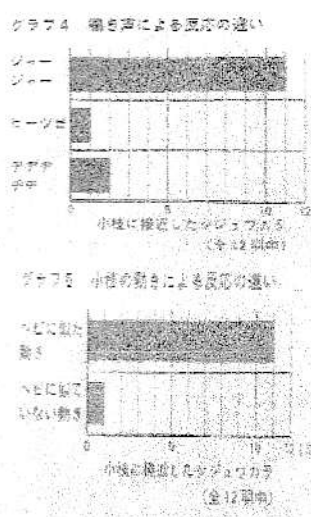
十一月二十四日（水）実施

□ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

しかし、この実験結果から、シジュウカラの「ジャージャー」という鳴き声がへびを示す「単語」であると、十分に主張できるでしょう。もしかしたら、「ジャージャー」という鳴き声は、「地面や巣箱を確認しろ。」といった命令であり、それを聞いたシジュウカラはへびの姿をイメージすることなく、それらの行動を取ったのかもしれない。そこで今度は、「ジャージャー」という鳴き声を聞いたシジュウカラが、実際にへびの姿をイメージしているのか検証しようと考えました。私たちの場合、単語から得たイメージによって、物の見え方が変わってしまうことがあります。例えば、道路に落ちた木の枝でも、誰かがそれを指して「へびだ！」と言ったら、周りの人は思わず身構えることでしょう。これは、「へび」という単語からその姿をイメージし、枝を一瞬、本物のへびと見間違えてしまうからです。同じように、シジュウカラにも見間違いが観察されれば、「ジャージャー」という鳴き声からへびの姿をイメージした証拠になると考えられます。

実験の手順は、以下のとおりです。まず、二十センチメートルほどの長さの小枝にひもを付け、木の幹に沿うようにぶら下げます。そして、スピーカーから「ジャージャー」という鳴き声を流します。そのうえで、遠くからひもをゆっくりと引き、まるで幹をはい上るへびのように小枝を動かしました。

すると、「ジャージャー」という鳴き声を聞かせたシジュウカラは、へびのように動く小枝に近づき、確認するのとがわかりました。いっぽう、「ジャージャー」以外の鳴き声を聞かせた場合、小枝に接近するシジュウカラはほとんどいませんでした（グラフ4）。また、「ジャージャー」という鳴き声を聞かせながら、小枝を大きく左右に揺らし、へびに似ていない動きとして見せた場合も、同様の結果となりました（グラフ5）。つまり、シジュウカラは、「ジャージャー」という鳴き声から幹をはいへびの姿をイメージし、それに似た動きをする小枝をへびと見間違



えたのだと解釈できます。

二つの実験の結果から、「ジャージャー」という鳴き声を聞いたシジュウカラはへびの姿をイメージし、そのうえで、へびを探しに役立つ特別な行動を取ることがわかりました。ここから、「ジャージャー」という鳴き声は「へび」を意味する「単語」であると結論づけられます。

① 上の文章において、筆者は何を検証しようと考えたか。文章中から四十四字で探し、初めと終わりの五字を書きなさい。

② グラフ4・5から読み取れることを、次から一つずつ選びなさい。

- ア 「ピーツピ」という鳴き声以外には反応する。
- イ 「ジャージャー」という鳴き声に反応する。
- エ 小枝の動きには反応しない。

③ 「同様の結果」とあるが、どんな結果か。文章中から二十文字で書きなさい。

④ 「ジャージャー」が「地面や巣箱を確認しろ。」という命令ではないといえるのはなぜか。次の文の空欄に入る言葉を十二文字で書き抜きなさい。

「ジャージャー」が「地面や巣箱を確認しろ。」という意味なら小枝の動きに関係なく、「ジャージャー」という鳴き声のときはいつも はずだから。

⑤ 筆者が「ジャージャー」という鳴き声は「へび」を意味する「単語」であると結論づけられます。」と述べる根拠はどんなことか。「実験から」に続けて、五十文字以内で書きなさい。

二 次の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

くらのもちの皇子は、蓬萊の玉の枝を探しに行く人々に告げて、いつた船出するが、すぐに引き返し、かねての計画どおり、人目につかぬ家に閉じ籠もった。それから三年の間、玉作りの匠たちと寝食を共にして、にせの玉の枝を作らせた皇子は、今船を下りたばかりというふうをよそおって、翁の家を訪れる。そして、架空の冒険談をまことしやかに物語る。

【古文】

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鏡を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へてはいはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらめぐれば、世の中になき花の木も立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照り輝く木も立てり。その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわるかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

【現代語訳】

これこそ私が探し求めていた山だろうと思つて、(うれしくはあるのですが)やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三日ばかり、(様子を見て)見て回っていますと、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、銀のお椀を持って、水をくんでいきます。これを見て、(私は)船から下りて、「この山の名は何と申すか。」と尋ねました。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。これを聞いて、(私は)うれしくてたまりませんでした。

その山は、見ると、(陰しくて)全く登りようがありません。その山の斜面の裾を回ってみると、この世には見られない花の木々が立っています。金・銀・瑠璃色の水が、山から流れ出てきます。その流れには、色さまざまの玉でできた橋が架かっています。その付近に、光り輝く木々が立っています。その中で、ここに取つてまいりましたのは、たいそう見劣りするも

のでしたが、(姫が)おつしやつたものと違つては(いけないだろう)と思ひ、この花の枝を折つてまいつたのです。

① 難題を与えられたくらのもちの皇子は、どんな行動をとつたか。次の文の空欄に入る言葉を書きなさい。

人目につかぬ家に三年間閉じ籠もり、玉造の匠たちに今船を下りたばかりというふうをよそおい、翁の家を訪れた。

② くらのもちの皇子が次について語つたことを、( )の字数に合わせて【古文】から書きぬきなさい。

- ・ 山の中から出てきた女の行動 (十五字)
- ・ 目の前の山が蓬萊山だとわかつたときの皇子の気持ち (十二字)

③ 「違はましかば」とあるが、何と違つてはいけないのか。空欄に合う言葉を書きなさい。

・ かぐや姫が  ものと

④ くらのもちの皇子が「いとわるかりしかども」と言つたのは、なぜか。次から一つ選びなさい。

- ア 蓬萊山には美しい木々がありすぎて、この枝がいちばん美しいかどうか確信がもてないから。
- イ 人間が作った玉の枝なので、誰が見ても不自然な作り物だとわかり、自信がもてなかつたから。
- ウ 姫の言いつけどおりの玉の枝を持ち帰つたのだから、見劣りしていても許されると考えたから。
- エ 見劣りするものだと言うことで、にせの玉の枝を本物であると信じさせようと思つたから。

③ 次の詩を読んで、次の問いに答えなさい。

大阿蘇

三好 達治

雨の中に馬がたっている  
一頭二頭子馬をまじえた馬の群れが  
雨の中にたっている  
馬は蕭々と降っている  
馬は草をたべている  
尻尾も背中も鬣も ぐっしよりと濡れそぼって  
彼らは草をたべている  
草をたべている  
あるものはまた草もたべずに  
きよとんととしてうなじを垂れてたっている  
雨は降っている 蕭々と降っている  
山は煙をあげている  
中岳の頂から うすら黄いろい  
重く苦ししい噴煙が濛々とあがっている  
空がちめんの雨雲と  
やがてそれははじめもなしにつづいている  
馬は草をたべている  
草千里浜のとある丘の  
雨に洗われた青草を 彼らはいっしんにたべている  
たべている  
彼らはそこにみんな静かにたっている  
ぐっしよりと雨に濡れて  
いつまでもひとつとところに 彼らは静かに集まっている  
もしも百年が この一瞬の間にたつたとしても  
何の不思議もないだろう  
雨が降っている 雨が降っている  
雨は蕭々と降っている

① 「雨の中に」とあるが、雨はどのように降っているのか。次から一つ選びなさい。

- ア だんだんと強まる感じ。
- イ 静かでもの寂しい感じ。
- ウ 激しくたたきつける感じ。
- エ 降ったりやんだりする感じ。

② 詩の中で、作者の感動が表現されている一行を探し、初めの六字を書き抜きなさい。

③ 詩の中では、ほとんどの行の末尾に「ている」の表現が使われている。この表現による効果を、次から一つ選びなさい。

- ア 長い時間が経過したことを感じさせる効果。
- イ 動作や状態が続いている感じを表す効果。
- ウ スピード感や緊迫感を感じさせる効果。
- エ くり返して重々しさを感じさせる効果。

④ 次の傍線部を漢字に直しなさい。

① じょうきょうを知る。 ② ぐうぜんが重なる。

③ 案をこうていする。 ④ 文章のぼうとう。

※一段下がっている行は前の行の後に続くため、本文では一行として考えること。

⑤ 使者をむかえ入れる。

【五】 次の傍線部の漢字の読みを答えなさい。

- ① 鳥の繁殖期。 ② 賞金の獲得。 ③ 神社の境内。
- ④ 籠に収納する。 ⑤ 贈り物をする。 ⑥ 敵を威嚇する。
- ⑦ 戦争の脅威。 ⑧ 歌を披露する。 ⑨ 説得を諦める。
- ⑩ 観客の目を奪う。

【六】 次の傍線部の言葉を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

- ① 天人のよそほひしたる女
- ② 女、答へてはいはく、
- ③ よろづのこと
- ④ みたり
- ⑤ 登るべきやうなし

【七】 自分の生活を振り返り、故事成語が表す意味と同じような体験をしたことがないかを考え、その故事成語を使って体験文を書きなさい。ただし、次の条件に従うこと。

- 1 百六十文字以上、二百字以内で書くこと。
- 2 四文以上の文章にすること。
- 3 「いつ・どこで・だれが・どうした」を明らかにして書くこと。
- 4 体験と故事成語の意味との関連がわかるようにすること。

【参考】 故事成語とその意味 (国語ワークより)

- ・推敲 (詩や作文を練りなおすこと) ・蛇足 (よけいなもの)
- ・漁夫の利 (二人が争う間に、別の人が得をすること)
- ・四面楚歌 (周りを敵に囲まれること)
- ・五十歩百歩 (たいしてちがいがいいこと)
- ・背水の陣 (決死の覚悟でのぞむこと)
- ・塞翁が馬 (人間の幸、不幸は予測できないこと)
- ・画竜点睛 (最後の仕上げをすること。「:を欠く」で肝心な点が抜けていること) ・完璧 (欠点がなく、完全なこと)
- ・呉越同舟 (ふだん仲の悪い者どうしが、同じ場所に居合わせること) ・圧巻 (書物などで最も優れているところ)
- ・鼎の軽重を問う (人の実力をうたがうこと)
- ・杞憂 (取り越し苦労をすること)
- ・杜撰 (物事がいいかげんなこと)
- ・虎の威を借る狐 (強い者の権力を借りていばること)
- ・出藍の誉れ (弟子が師よりも優れること)
- ・竜頭蛇尾 (初めは勢いが盛んだが、終わりになるほどふるわないうこと)
- ・守株 (古い習慣にこだわっていると、時代に対応できないこと)
- ・大器晩成 (大人物が大成するには、時間がかかる)
- ・温故知新 (昔のことを研究して、新しい真理を見つけ出すこと)
- ・螢雪の功 (苦勞して勉学に励み、成功すること)
- ・助長 (手助けが逆効果になること。現在では物事の成長発展に他から力を添えること)
- ・他山の石 (他人のどんな言行でも自分を構造させる助けになること) ・登竜門 (立身出世のための難しい関門のこと)
- ・切磋琢磨 (学問や精神を磨くこと。仲間が励ましあい、向上すること) ・一炊の夢 (人生の華やかさのはかないこと)
- ・君子は豹変す (りっぱな人は自分の過ちを改めるのも早い)

【※注意※解答用紙は裏面になります。】

【八】 二期の国語では、古典を学習した。古典の学習を通して、興味をもったことや、もっと知りたいと思つたこと、現代の人々や文章につながることにについて、振り返って書きなさい。

